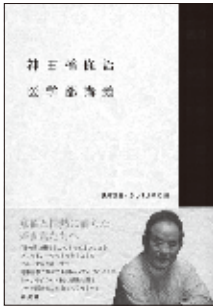


## ■ 書 評



神田橋條治  
医学部講義

神田橋條治 著  
創元社  
2013年9月, 312頁  
本体価格 2,500円+税

良書と巡り会っても、読み手の何かが足りないせいで理解が深まらないことがある。そんなとき筆写をすると、渋滞していた思考がすっと整理されることがある。あるいは、音読がよいこともある。声に出して読むことで、文章のもつ生命力が息を吹き返し、筆者の言わんとすることが、読者の体にじかに伝わってくる。ときに、奥底に眠っていた情熱が湧き上がってくることすらある。

本書は、九州大学で年一回行われている、精神療法の講義を集めたものである。帯には、老練さのなかに瑞々しい好奇心がきらめく笑みをたたえた神田橋條治氏がひょっこりと待ち構えている。本書を手にとったら、まずは、黒木俊秀氏の臨場感ある前書きと、かしまえりこさんの愛情にあふれた後書きに目を通し、各章に移るのがよい。

いくつかを抜粋しよう。

そしてそのときに何が起ってくるかと言うと、「快食」「快眠」「快便」というような生理的なよさがありますし、「自分らしい」という感覚があります。その人らしさが発揮されているから、生体に余裕があります。いろいろな余裕があることによって、能力のさらなる発揮ができますね。

それからもう一つ、「無理がきく」ということがある。無理がきくというのは、一時の頑張りがきくということ、簡単に言えば「元気だ」ということです。健康だという感じが肉体的にあれば、自分の生活パターンと自然治癒力を含めた生体の素質とが合っているということです。

～自然治癒力を主役に (p.81)

多くの場合、環境は変えられないから、環境となんとか折り合っていけないといけない。それで

折り合う方法をこっちが教えるとなると、多少、教祖様がかってくるでしょう。「こうしなさい。人はこうだよ」と教えると教祖がかってくる。

環境と折り合う方法を自分で発見すると、もつとぐっといいじゃない。自分で環境と折り合う方法を発見するように、何か手助けしてあげる。「この辺が目につけどころじゃないの?」とちょっと示唆だけ与えて、あとは自分でやれば、本人にとっては、こっちのほうがうんといいのよ。

～講義という名の精神療法 (p.195)

そこで「職場復帰と仕事復帰とがある」と語りかける。「職場復帰という考え方と、仕事復帰という考え方は違うのが分かりますか?」と。これが分からない人は復職はだめ、まだ早い。うつ病の脳は生き甲斐を求めていく脳で、生き甲斐は職場にはなくて、仕事にあるわけです。だからこの「職場」と「仕事」の違いが自発的に分かるように、「感じとして分かる?」と聞くの。こっちが教え込むんじゃないのよ。

～うつ病の精神療法 (p.255)

ここでは、コツ三部作の内容がより深められ、将来の医療を担う聴衆に向けて平易な言葉で語られている。そして、十数年にわたって練り上げられた発想は、古稀記念に出版された『「現場からの治療論」という物語』や日本うつ病学会での講演「うつ病診療のための物語私案」(『現代うつ病の臨床』に収録されている)などに実を結んだ。

磨き抜かれた思考と軽やかな閃き、実践するタフネス、そして、それらを後進に惜しみなく授ける姿勢に、いつも驚かされる。忙しい日常臨床で頭が固くなったときにこそ、本書で語り紡がれてきた臨床の知恵が役に立つに違いない。読者の悩みは解きほぐされ、創意工夫によって臨床を楽しむむゆとりを取り戻すことができるだろう。

本書は、2012年夏に出版された『精神科講義』の姉妹本である。これらは、講義録であるので当然、音読すると気持ちがいい。コツ三部作以来の神田橋ファンはもちろんのこと、なじみやすいところから稀代の精神療法家の臨床感覚に触れたいという方にも、推薦したい良書である。

(田中伸一郎)